鎭西上人の教義

石橋誠道

一　宗祖門下の諸流とその正流

言ふまでもなく我國に於ける宗祖大師の御開宗は、大旱の雲霓であり暗夜の燈明臺であつた。一切の人はよみがへりすべての人は救はれた。さればこの教が世に公にせらるゝや、忽ちにして日本全國津々浦々に至るまで、響き亘らぬ所はなかつた。老弱男女も掌を合せ、口を揃へて念佛し、貴賤貧富も膝を屈して、阿彌陀如來の前にひれ伏した。かくて宗祖の門弟は、いやが上にもいや增して、その數實に數百人、現今その名の殘されてあるもの、優に二百數十名と注せられてある。

その中最も勝れた人は、鎭西流の聖光上人、西山流の證空上人、長樂寺の隆寛、九品寺の長西等である。この外尙ほ成覺房の一念義、親鸞の一向義、法本房の寂光義等がある。而して酉譽の著述と傳へられてある、淨土三國佛祖傳集下卷には、更らに幾多の私流を記して、聖覺法印の說法義、薩生法眼の三昧義、明遍僧都の道心義、俊乘房の勸進義、三井の公胤の選擇義、信空上人の諸行義、本願房の本願義、悟阿上人の一心義、覺阿上人の西方義、念佛房の他力義、一遍房の遊行義等があつたことを傳へてゐる。此等の中で、說法義とか勸進義とかいふものは、流義と言はるゝほどでも

ないが、何れも有名な人々で、誠に多士濟々たるものであつたと言はねばならぬ。

而してそれらの門弟の中、眞に宗祖の眞精神を傳へ、宗義の眞相を繼承したものは、唯だ鎭西の聖光上人一人であつた。卽ち宗祖入滅の後、諸の弟子達は各の自ら、宗祖の眞意を傳へたと稱し、勝手に新案の義を主張し、盛んにそれを宣傳した。それ故に鎭西上人は、大に之を慨嘆し、なんとかして其れを防ぎ止めんとて、非常に苦心されたのであつた。その趣は鎭西上人の著述の中、ごれを讀んでもみなその意味が溢れてゐる。今その中で特に有名な末代念佛授手印の序分を抄出して、その心境を明したいと思う。

それ以れば九品を宿となすには稱名を以て先となし、八池を棲と爲さんには數遍を以て基となす。念佛とは昔し法藏菩薩の大悲誓願の筏、今ま彌陀覺王の廣度衆生の船なり。是れ則ち菩薩利益衆生の約束、是れ則ち如來平等利生の誠言なり、尤も憑もしいかな、尤も眞なるかな。所以に弟子、昔は天台の門流を酌んで圓乘の法水に浴し、今は淨土の金池に望んで念佛の明月を翫ぶ。之を以て、四敎三觀の明鏡は、相傳を證眞法印に受け、三心五念の寶玉は、禀承を源空上人に傳ふ。幸なるかな辨阿、血脉を白骨に留め、口傳を耳底に納む。慥かに以て口に唱ふる所は五萬六萬、誠に以て心に持つ所は四修三心なり。之に依て自行を專にするの時は、口稱の數遍を以て正行となし、他を勸化するの日は、稱名の多念を以て淨業を敎ゆ。然りと雖も、上人往生の後、其義を水火に諍ひ、其論を蘭菊に致す。還て念佛の行を失し、空く淨土の業を廢す。悲いかな悲いかな。いかがせんいかがせん。爰に貧道已に七旬に及び、餘命また幾ならず。惱まず愁へずして空しく止む可らず。之に依て肥州白河の邊り、往生院の內に於て、二十有餘の衆徒を結び、四十八の日夜を限て、別時の淨業を修し、如法の念佛を勤む。この間に於て、徒らに稱名の行を失はんことを惱み、空く正行の勤を廢せんことを悲み、且つは然師報恩の爲、且つは念佛興隆の爲に、弟子が昔の聞に任かせ、沙門

が相傳に依て之を錄して留めて向後に贈る。仍て末代の疑を決せんが爲、未來の證に備へんが爲に、手印を以て證となして、筆記すること左の如し。

と記して、その後に念佛授手印の本文があり、我宗の宗義の要領が記されてあるが、この序を讀む時言々句々、切々心胸に迫るものがあるではないか。而してこの授手印の要領は、宗祖大師から相傳された、最も大事なことのみで、六重、二十二件、五十五の法數である。六重とは(一)五種正行、(二)助正二行、(三)三心、(四)五念門、(五)四修、(六)三種行儀である。以上を合すれば二十二件五十五の法數となり、それが結局念佛一行三昧に結歸するものと教へられてある。而して此等六重二十二件の內容に就ては、通常我宗に於て教ゆる所の教義と違つた所はないから、今更委しく說明する必要はないと思ふ。

更らに鎭西上人が、宗祖から相傳された教義として能く纏まつてゐるものは、西宗要六卷であるが、其の內容は八十件の問題を揭げて、それが一々說明されてある。然るに本書は、嘉禎三年に三祖記主禪師が、筑後の天福寺に於て、正月十八日から四月二十日までの間に、鎭西上人から(上人七十六歲)口授を受けて筆錄されたものである、そは鎭西上人が曾て若かりし時、宗祖大師から相傳された秘錄の趣であることは言ふまでもない。故に了譽の鎭西宗要本末口傳鈔には、此集は筑紫上人、吉水上人に値ひ奉り、暗に淨土の章疏を聽聞するの時、不審を記し題を擧げて問ひ申し、一々に師の仰せに隨て口筆し給ひしなり。又然阿相承の時、此集を口筆に書き給へり、此の代に卷を調へて宗要と名けしなりと記されてある。而して法然上人の門弟には、前に述べた如く錚々たる人が多かつたのに、宗祖相傳の教義をそのまゝ記したものは殆んどなかつた。然るに今鎭西上人の授手印幷に西宗要には、宗祖の教義そのまゝを、記して傳へられてあることは、誠に嬉しいことである。

二　破邪顯正の態度

前に述べた如く鎭西上人は、宗祖相傳の教義を最も尊重せられたが、それと同時に若しその教義に反した說を稱へる者があつた場合には、極力それと戰つて、打ち破らずにはおかぬといふ態度であつた。それは恰かも忠實なる武將が、身命を屠してその本城を守るといふ態度と同じであつた。それ故に相傳の義を記した念佛授手印幷に西宗要を除くの外上人の著述の殆んどすべてに、みな他の異義が反駁されてある。例へば徹選擇集には、一念義と思はるゝ義が破せられてあり、念佛名義集、念佛三心要集には、一念義、西山義、寂光土義が難破されてある。又淨土名目問答には一念義、識知淨土論には西山義が反駁されてある。然れば上人の著述の殆んどすべては、此等の諸義を排斥して、吉水正流の眞義を顯さんが爲に作られたもの察することが出來る。今念佛三心要集の一節をあげて、讀者の參考に供すれば、

然るに近代の人々學文を先として其稱名を物のかずとせず、是れ卽ち邪義なり邪執なり、無道心の人なり、近代の人々の義とは、或人の云く、善導は安心門の義を建立し給ふ、安心門の日は、學文すべし、念佛を修せずと云ふも、安心門に依て往生を得ん、その起行の人は、念佛を修せしむと云ふとも、義を知らざるに依つて、往生を得ずと。或人云く、行門、觀門、弘願門の三門を立て、弘願門は往生を得る、その行門の人は往生を得ず、弘願門を知らざるに依るなり、之に依て學文を能くして弘願門に歸すべしと云々。或人云く、寂光土の往生最も是れ殊勝なり。稱名往生は是れ初心の人の往生なり、その寂光土の往生は尤も深しと。此三人の義は近代興盛の義なり。已上の三義は是れ邪義なり、恐るべし恐るべし、全く法然上人の御義に非ず、梵釋四王を以て證と仰ぎ奉る、三義共に學文せざる無智の僧達の愚案なり、憍慢なり、善導の御釋に相應せざる義なり、心あらん人能く能く善導の御釋を見て思ひ合すべし。

と破られてある。思ふに當時この三流が、最も盛んに行はれて、各の自說を稱讃し宣傳流通した爲に朱紫混亂せんことを恐れ、上人は極力それと戰つて其の正流を亂さないやうに懸命に努力し給ふたのである。されば嘉禎三年の九月、勢觀上人が鎭西上人に送られた書翰の一節に、抑も先師念佛の義、末流濁亂、義道昔に似ず、說く可らず候、御邊一人は、正法傳持の由承り及び候、返す返すも本懷に候と記された文と照應して、誠に貴く思はるゝではないか。

三　聖道門に對する緩和的傾向

鎭西上人の敎義は、固より宗祖相傳の義には違いないが、聖道門の敎義に對する態度が餘程穩かであつたことに於て、やゝ相違點があると言はねばならぬ。卽ち宗祖は選擇集に於て、聖道門を廢し、諸行を廢し、持戒を捨て、菩提心を却け、讀誦大乘、解第一義等を廢捨して、唯だ念佛の一行が立てられてあるが、鎭西上人は婉曲に其等の諸行が緩和されてある。例へば徹選擇集に於て、選擇本願の念佛は上は龍樹・彌陀・三世諸佛に通るすと說明されたこと。或は念佛に總と別との念佛があつて、萬行は總の念佛であり、口稱名號は別の念佛であると見られたこと。若くは念佛三昧に深位の念佛三昧（菩薩が三世十方の諸佛を念することと）、淺位の念佛三昧（稱名念佛して見佛することと）ありと說き。或は六度の中に三福を攝し、三福の中に稱名念佛を攝すといふ說明などは餘程緩和的の說明である。

勿論此の點に於ては決して鎭西上人ばかりではない。宗祖門下の諸流に於て、いづれもこの傾向があつたと思はれる。例へば西山上人が諸行は雜毒の行ではあるが、一たび三心正因を領解すれば、正因の上の正行となつて念佛と同じ功德となると論じ。又長西が念佛は勿論、諸行も本願であると稱へ。親鸞が大經の三輩、觀經の三福九品を第十九願の開說として、この願に乘じて往生すると說いたことなどは、聖道門に對して餘程緩和した說明と見ることが出來る。そ

は恐くは宗祖の晩年からその滅後にかけて、淨土教に對する諸宗の攻擊、聖道諸宗の奮起改善等が少からず影響して、一潮流をなした爲に、斯る說明をすることが、其宗宣傳の上に於て、最も有利であつたからであらう。

而して今鎭西上人に就て、その主なるものを記すことゝする。卽ち徹選擇集に就て、選擇本願念佛が、三世諸佛に通徹するといふ義が述べられてあるが、これは上人が大論を讀んで悟られた所の已證の義であつて、宗祖大師等が未だ曾て言はれたことのない說である。徹選擇集上卷に選擇本願念佛の義は、更らに法然上人の義ではない、是れは卽ち龍樹菩薩の義である。然しこれは龍樹菩薩の義ではない、卽ち法藏菩薩の義である。いやこれは法藏菩薩の義ではない、卽ち先佛の義である。先佛とは卽ち三世諸佛である。旣に先佛の義であるから、淨佛國土成就衆生の直道であつて、十方三世の菩薩の行願である。然しながらまた之を逆に言へば先佛の義であるから卽ち法藏菩薩の義である。法藏菩薩の義であるから卽ち龍樹菩薩の義である。龍樹菩薩の義であるから卽ち法然上人の義であると言はねばならぬ。然るに法然上人は、廣學博覽にして旣に此の道理に通徹し給ふたから、深くそれに信服して、この義を明かにする爲にこの集を作つたと言はれてある。上人は更らに言を添へて。念佛往生を知らんとすれば、まづ一切の菩薩の淨佛國土成就衆生の義を知らねばならぬ。又一切の菩薩の本願を習はねばならぬ。余は昔し先賢高才の人に就て、かの淨佛國土成就衆生の義を傳へ、今また淨土門に入つて後、この選擇本願念佛往生の義を相傳した。二師の相傳を以て聖教の文を見るに、その義更らに矛盾せず、單聖道の人、單淨土の人は、この事は能く解らない。聖道と淨土と兼學の者こそ、能くこの意味を了解することが出來る。この意味を以て一切の大乘經、幷に大乘の論を見れば、この上もなく貴くそれが思はるゝ、これが卽ち聖教の源底であり、法門の奧義であり、佛菩薩の秘術であると記されてある。已上は鎭西上人が自ら證られた深義であつて、選擇本願の念佛が、自ら三世諸佛の常道である、淨佛國土成就衆生に通徹することを知らしめやうと

したものである。此中自ら聖淨二門の疎隔を緩和し、調和せんとする傾向のあることを見出すことが出來ると思ふ。但し鎭西上人の聖道家に對する態度は、斯樣に調和的であつたにも關らず、異流異派に對する態度は最も嚴しく反對せられてあつた。これ全く宗祖の眞の精神を後世に傳へんと思召された、老婆心に因るものであらう。

四　淨佛國土と不離佛値遇佛

鎭西上人は徹選擇幷に識知淨土論に於て、淨佛國土成就衆生の行に就て、最も委しく論ぜられてある。然し此は念佛三昧の深遠なる意味を顯す爲であることを自ら公言されてある。成佛國土成就衆生といふ意義は、高位の菩薩が一の佛國から又他の一佛國に至り、佛國土を淨め衆生を成就するの意味である。卽ち先づ自分と他人との身口意三業を淸淨にし、淨佛國土の願と行とを成就して、自行化他の功德を滿足した後に、遂に成佛の彼岸に達し、因位の本願に任せて十方の衆生を敎化し成就するのである。然るに菩薩がこの淨佛國土成就衆生の行を成功するに就ては、最も念佛が必要である。その念佛とは卽ち不離佛値遇佛である。そは恰かも嬰兒が常に母を離れず、赤子が每に母の懷に抱かれてあるやうなものである。此の如く菩薩が常に佛を離れず、佛に値遇することが、それが卽ち念佛三昧である。故に徹選擇下卷には、之を問答して曰く、問て曰く、念佛三昧とは何の義ぞや、答て曰く念佛三昧とは是れ不離佛の義なり、問て曰く、不離佛とは何の義ぞや、答て曰く不離佛とは値遇佛の義なりと言はれてある。然れば菩薩はこの念佛三昧に依て佛國土を淨め、衆生を成就することが出來る。然しながら此の如き念佛三昧は卽ち菩薩の深位の念佛三昧である。然るに又凡夫の念佛者に於ても、不離佛値遇佛の義が存する。卽ち稱名念佛して常に見佛を期待し、又は護念・來迎・往生等を期待し、一心に念佛して怠らなければ、遂には現身に佛を見奉り、彌陀の來迎に預かつて、往生の本意を遂ぐること

が出來る。此れ卽ち不離佛値遇佛の義であつて、此は凡夫淺位の念佛三昧である。然るに今この念佛は、その昔し法藏菩薩が、念佛三昧に依て、佛國土を淨め給ひし時、衆生を成就せんが爲に、巧み出し給ひしの所の本願往生の念佛である。故に最も信賴すべき、本願不思議の念佛であることを深く信じて疑つてはならないと敎へられてある。之を要するに鎭西上人の敎義は、宗祖の敎義をそのまゝに傳承して、一器の水を一器に瀉すが如く、相承して更らに漏すことなく、若しこの宗義に背くものあれば、極力それを反駁し、更らに念佛の根源に溯つて、その眞意義を發揮せんと努められたのであつた。